

# 漂流者たちと日本の領土の歴史

2022 3/8(火) - 5/8(日) | 日本の島々をめぐる苦難と発見と交流の物語

前近代、航海技術が未発達だったころ、日本及びその周辺で多くの漂流事件が発生しました。漂流の末に我が国ではあまり知られていなかった島に漂着し、日本人の日本周辺の島々に対する認識が深まったり(「地理的理解の深化」)、漂流者が外国に漂着し、救援の手が差し伸べられる中で、国際的な「接触」や「交流」が生まれ、その中で領有権に影響を与える出来事が発生したりすることがありました。

我が国固有の領土である北方四島、竹島及び尖閣諸島についても、その歴史を振り返ると、多くの漂流をめぐるエピソードがあります。また、江戸時代、鳥島や小笠原諸島への日本からの漂流者の漂着が、両島の領有や開拓のきっかけとなっています。

この展示は、漂流事件の紹介を通じて、我が国の領土に関する歴史を振り返ろうとするものです。

## 展示構成

Prologue 江戸時代の国際情勢と漂流

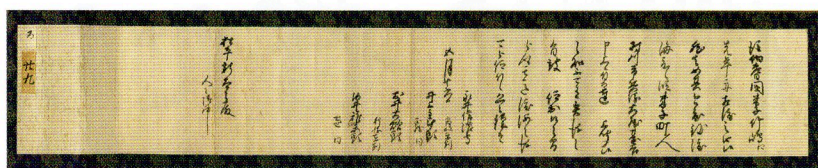
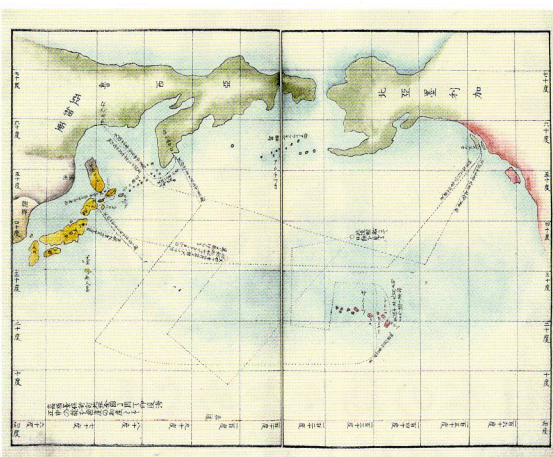
Chapter 3 尖閣諸島

Chapter 1 北方四島

Chapter 4 鳥島・小笠原諸島

Chapter 2 竹島

## 展示資料のご紹介

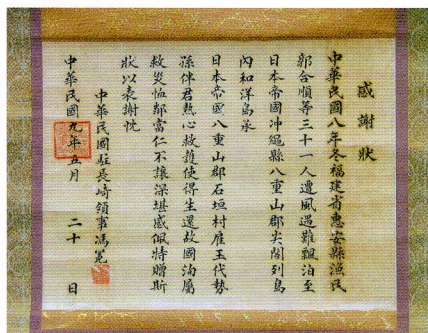
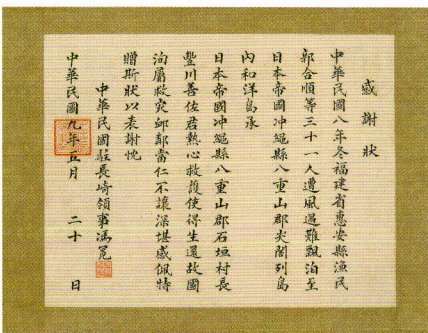


上:竹島渡海御免の違書(写)(米子市立山陰歴史館所蔵)[複製品展示]

1618年(1625年の説もある)、将軍が大谷、村川両家による鬱陵島(当時の名称は「竹島」)渡海を許可したことを伝える文書の写し。鬱陵島渡海の願いのきっかけは、大屋(谷)甚吉の鬱陵島漂着でした。

左:『時規物語一』首巻より漂流図  
(公益財団法人前田育徳会所蔵)  
[複製品展示]

加賀藩主の命により、1838年に漂流した越中(現:富山県)の「長者丸」の乗組員の供述に基づき遠藤高環が編纂。択捉島までが日本本土と同じ色で塗られています。



尖閣列島遭難中華民國感謝状 豊川善佐氏宛(左) 玉代勢孫伴氏宛(右)  
(石垣市立八重山博物館所蔵)[パネル展示] ※常設展スペースにて、複製品展示(左のみ)

尖閣諸島に漂着した中国の漁民の救助に対し中華民國駐長崎領事官が1920年に日本側に送付した感謝状。  
『日本帝國沖繩縣八重山郡尖閣列島』と記されています。



「母嶋南手之山上喫午飯圖」宮本元道『小笠原島真景圖』  
(国立国会図書館所蔵)[パネル・映像展示]

1861年、小笠原島に派遣された幕府調査団に参加した宮本元道によるもの。幕府の小笠原島調査は1675年に引き続き2度目でしたが、最初の調査のきっかけは漂流です。